海外だより

コプト修道院訪問記

塩尻和子

コプト教会では4世紀頃から修道院活動が盛んになり、キリスト教世界では最初に修道院制度を成立させたことは周知の事実ですが、現在でもエジプト各地に由緒のある古い修道院が見られます。コプト修道院は殆どが聖家族（幼子イエス・母マリア、その夫ヨセフ）のエジプト逃亡伝説の足跡の上に建設されていますが、今回訪問したワーディ・ナトルーンの修道院もその例にもれません。（しかしそれにしても幼子を連れた一家はなんと遠くまで歩かされたことでしょう。一説によれば王家の谷で有名なルクソールの手前まで逃れて行ったことになっています。）

ワーディ・ナトルーンは幅8キロ、長さ約50キロ、海面下約24メートルの細長い低地です。ワーディ・ナトルーンとはナトリウムの谷という意味ですが、その名前の通り大量のナトリウムを含んでいて、古代エジプトの時代から儀礼用やミイラ製造用などにナトリウムが用いられたため、古代から神々の宿る場所と考えられていました。幾つもの塩湖が並んだ湿地帯ですが、近隣地域は緑化がすすんで豊かなオアシスになっています。カイロから約110 キロ、ピラミッドを左手に見ながらアレキサンドリアへ向かう高速道路、砂漠道路へ入り、カイロ・アレキサンドリア間の中間地点にあるレスト・ハウスを目印に走ります。高速道路を隔ててその反対側の砂漠には近代的な新開地、サダト・シティが建設されています。

ワーディ・ナトルーンの修道院は湿地帯の南側の砂漠に点在し、現在4つの修道院が活動を続けていますが、その内3つまでは普通の車で行くことができます。最もカイロ寄りにあるマカリウス修道院（Monastrey of St. Macarius）は聖マカリウス（A.D.300 ～390?）によって始められ、6世紀にはコプト総主教の本拠地となりましたが、遊牧民の攻撃によって何度も破壊されました。本格的な再建は1969年から始まり、今の建物は古い遺構の上に1975年以降に建てられたものです。現在ではエジプトで最大規模を誇り、最も格式の高い修道院とされ、法王が必ず訪問する修道院の一つです。施設の内部には聖マカリウス教会、49殉教者教会、聖処女のチャペル、聖エスケロン教会など多くの教会や会堂があり、保存状態は悪いが貴重なイコンや壁画も残っています。

マカリウス修道院については宮城学院女子大学の山形孝夫先生の著書『砂漠の修道院』（新潮選書）に調査報告があります。山形先生が調査された頃はあたりは地平線まで続く砂漠だったようですが、最近では緑化事業が軌道に乗り、すっかり緑の農園の中の修道院になっています。つい2、3年前までは砂漠道路を走ると、行く手左手に高い塀で囲まれた修道院のまるで砂漠に浮かぶ軍艦のような遠景が認められたものですが、この夏再訪してみると、もう緑に覆われて、遠くからははっきり形が分からなくなっていました。

修道院への小さな標示板を目印に砂漠道路を左に折れると、ナツメヤシやオリーブの並木がある一本道が真っすぐに修道院の門へと導いてくれます。訪問の意志を告げて門を開けてもらい、よく整備された農園の中をさらに1キロ近く走って、ようやく高い塀で囲まれた修道院にたどり着きます。門にはいつもアラビア語、英語、フランス語で「立ち入り禁止」の札がかかっていますが、特別なミサがない限り、いつでも見学することができます。しかし、できれば事前に法王庁から許可を取って出掛ける方がよいようです。

ワーディ・ナトルーンの修道院はどれも豊かな自給自足の農園を持っていますが、マカリウス修道院には特に優れた農場や牧舎があり、一面の白い砂漠の中に、修道院の所有地だけが緑に覆われて広がっていました。外から見る修道院は、まる

で何ものをも寄せ付けないような威圧的なまでに高い塀に囲まれ、真夏の太陽の下でしんと静まり返って、人の気配すらありません。やっとくぐり抜けられるだけの小さな鉄製の扉を叩いてしばらく待ちます。世俗の世界と聖なる世界を隔てるこの古ぼけた重い扉を叩く時、私はいつも小さな不安感と期待感が交錯するのを覚えます。

やがて扉が内側から静かに開いて、黒衣の僧がそっと顔をだします。髭面に優しい笑顔、ゆっくりした動作で私達を招じ入れ、待ち合い室に案内してくれます。ここではもう世俗の時間は通用しません。何事もゆっくり、静かに、案内役の修道僧（呼びかけは神父様）が来るのを待ちます。若い僧がワーディ・ナトルーンのかすかに塩味のする水で入れた紅茶とおいしい手作りのクッキーを運んできてくれました。手入れの行き届いた簡素な庭園には焼け付くような真夏の陽光が白く輝いていますが、乾燥した空気は室内に心地よい風を運んできてくれます。遠くから農園のトラクターの音や給水ポンプのエンジンの音が風に乗って流れてきます。今では常時 100人近く居るといわれる修道僧は昼間はどこに行っているのか、その姿は殆ど見られません。しばらく待つと年の頃60才位の髭の白い修道僧（神父）がどこからともなく姿を現して、案内を始めて下さいました。英語はかなりブロークンで時々アラビア語になるけれど、笑顔を絶やさず、急がず焦らず、質問にはユーモアを交えて丁寧に答え、ゆっくりと案内をして下さいます。

1969年、それまで遊牧民さえも近寄らないような奥地の涸れ谷、ワーディ・ライアンでマッタ・メスキン神父に率いられて修道生活を営んでいた12人の僧たちが、時の法王の要請を受けてこの修道院に移動してきました。今回案内に立って下さった神父もその一人でした。数百年も見捨てられ廃墟になっていたマカリウス修道院の再建が始まり、砂に埋まっていた会堂が発掘され、修復されました。聖堂や城塞の遺構へ行くには中庭から４、５メートル位の階段をおりますが、この段差が現在の地表と16世紀頃の遺跡とのレヴェルの差を物語ります。

聖マカリウス教会はさらに２、３段階段を降りて、靴を脱いで入ります。中央にこの修道院の開祖である聖マカリウス、左手に洗礼者ヨハネ、右手に聖ベニヤミンが祭ってあります。至聖所は格子戸の隙間から覗き込むことができます。ミサに使う品々を一まとめにして風呂敷包みにし、至聖所の机においてあるのが、何やら懐かしいような思いがして微笑ましく見えました。祭壇や天井の一部に天使などを描いた古い壁画が僅かに残っているほかは新しく作られたものばかりで、扉や聖遺骸を収めた柩には黒檀と象牙を用いて魚、貝、孔雀や葡萄の木などキリスト教を象徴する図柄の細かな彫刻が施されていました。再建作業中に古文書の記述どおりに洗礼者ヨハネ聖堂の前、４メートルの地点にある地下道からヨハネの聖遺骸が見つかったと言われ、美しい柩に一緒に見つかった殉教者たちの遺骨とともに安置してありました。柩のすぐそばにはその地下道も保存してあり、床板を持ち上げると地下道が見えるようにしてありました。真偽の程は分かりませんが、聖遺骸を崇敬するコプトの修道僧にとっては極めて重い意味を持った信仰の一つなのでしょう。

おもしろいことに、祭壇の前を横切る時、神父は頭を下げようとはせず、堂々と背を向けて説明して下さいます。聖遺骸を収めた柩にももたれ掛かったり、ビロードの袋に入れて安置してあるところでは、その袋を手でころころ転がして撫でたり、と実に親しげに扱うのです。至聖所の中も、ここから覗いて見なさい、と手招きして格子戸のそばに連れて行って下さるだけでなく、私達が何に触っても禁止も注意もしないのです。無造作といってしまえばそれまでですが、貴重なイコンも剥がれ落ちそうな部分はなんと画鋲で止めつけてありました。近くにある聖ビショイ修道院でも至聖所の幕を挙げて、中の祭壇を写真に撮らせて下さったことを思い出しました。ここでは聖なるものへの権威付けは不必要なのかも知れません。あの入り口の鉄の扉をくぐった時から、生きているものはすべて聖なるものの近くに親しく在るということかも知れません。この塀の中では生と死、俗と聖の境界はもうなくなっているのでしょう。

ここで最も「砂漠の修道院」らしい遺跡は３階建の城塞で、並んで建てられている鐘楼を上って、

2階から釣り橋を渡って入ります。日干しレンガを積み、その上を土で塗り込めて作った城塞には遊牧民の襲撃から身を守るために数々の工夫がしてありました。まず釣り橋を引き上げ、鉄の扉を締めてしまえば建物への侵入は不可能です。数百年を経てボロボロになった鉄の扉が風雪を物語っていました。また建物の中を人が一人やっと通れるくらいの狭くて暗い秘密の通路が隠れ部屋へ走っています。「入って見ますか」と神父が笑いながら聞いたが、高所恐怖症でおまけに閉暗所恐怖症の私には入る勇気はありませんでした。1階には井戸と穀物倉庫、聖処女のチャペル、2階には天使ミカエルや修道院活動の祖でもある聖アントニウスなどのチャペルを中心にいくつかの小さな会堂があります。3階にはコプトの聖者を描いた貴重な壁画が残っていますが、修復工事で傷ついたり、雨水がしみたりして、保存状態はよくありません。　暗い階段を上り詰めると屋上に出ます。目の前に一気に白い光が広がりました。背後に新しい鐘楼が聳えたち、目の前には僧坊、診療所、食堂、印刷所、ゲストハウス、遠くに農場が広がっています。この印刷所では最新の印刷機が導入され、修道院長であるマッタ・メスキン（哀れなマタイという意味）神父の著書が次々と出版されています。農場とは反対側の砂漠にはマンショーピと呼ばれる瞑想用の洞窟があります。僧たちは聖アントニウスや聖マカリウスを倣って孤独を尊び、瞑想に耽ることが奨励されているからです。ゲストハウスには誰でも、いつまでも泊まって行ってよいということですが、私が聞いた限りでは、女性は残念ながら泊まれません。今年4月に訪れた時、昼食を用意するから是非食べて行ってくれと言われたのを、ちょうどイースター直前で僧たちが断食に入っていたので、遠慮して頂かないで帰ってしまったのが、今思えば残念です。今回訪ねた時にも顔見知りになったエレミア神父から「イースターの後で来るかと思って待っていたのに」と言われてしまいました。山形先生以来、特にマカリウス修道院では日本人は人気があるようです。

枚数も尽きましたので、ワーディ・ナトルーンのほかの修道院を簡単に説明致します。

聖ビショイ修道院（Monastery of St. Bishoy <Pschoi>）は聖マカリウスの弟子聖ビショイの名前を冠して7世紀に建設され、隣のシリアン修道院と一つの砦でつながっています。9世紀に建設された聖ビショイ教会（聖ビショイの聖遺骸が祭ってある）、天使ミカエル教会、18世紀のイコンなどがあり、土造りの聖堂はよく保存されていて、昔日の面影をしのぶことができます。屋上から隣のシリアン修道院を望む風景は白い砂丘が綺麗で印象的ですが、緑化事業のために湿気が多くなったせいか、小さな灌木が所々に生えて来ていました。修道僧の年令も若く、明るい家族的な雰囲気で親しみやすい修道院です。

隣あっているシリアン修道院（Monastery of the Syrians）は6世紀に設立された修道院で、8世紀にシリア商人によってシリア人修道僧用に買い取られたものです。15世紀以降はシリア人だけでなくコプト僧も加わり、現在ではコプト教徒の修道院となっています。日干しレンガ造りの古い建物が多く残っていて簡素で静かな修道院で、薄暗い聖堂には美しい壁画やイコンが数多く見られます。夏用と冬用と会堂が分かれているのが面白い。

ワーディ・ナトルーンの修道院は自給自足の共同体で、僧たちは農業、牧畜、品種改良、手工芸などに従事しており、多くは大学卒業者だといわれています。宗教的な行事のない時はいつでも見学できますが、できれば事前に法王庁から見学許可を取ってから出掛ける方が良いでしょう。修道院は高い塀に囲まれて、たいていの場合門が閉まっていますが、塀の上からぶら下がっている紐を2、3度引っ張るか、紐がない時は扉をノックして、しばらく待ちます。どの修道院でも英語や仏語のできるガイド役の僧（神父）がいるので安心して見学できます。

エジプトのモクスはどこも人が多くてゴミゴミして汚く、靴を脱いで入ると決まって足の裏が真っ黒になるのに、教会や修道院は殆どが清潔でゴミ一つ見当たりません。照りつける太陽、砂の匂い、古い遺跡の持つ時空を超えた雰囲気と爽やかな風、一生髭を剃らない黒衣の修道僧たちのやさしいほほ笑みとゆっくりとした動作、かすかな花の匂い・・・ワーディ・ナルトーンの修道院に共通する世界

です。ここでは「時間」がないような錯覚に陥ります。マカリウス修道院のまだ若い長身の修道僧が、はにかんだような笑顔を浮かべて、私にジャスミンの白い花を3本そっと手渡してくれました。暑い夏の日差しの中でふくいくとした香りが揺らぎました。

付記：

コプト教会の歴史は西暦1世紀、ローマ皇帝ネロ（西暦64）の時代に始まると言われる。聖マルコ（聖書のマルコ伝の著者と言われる）がアレキサンドリアを訪れ、当時のユダヤ人社会に宣教を始めて以来半世紀ほどの間にエジプト全土に広がったと見られる。中エジプトや上エジプトからは2世紀から2世紀前半の新約聖書の写本の断片が発見されている。2世紀末にはアレキサンドリアに神学校が設立され、クレメンス（160 ～215)、オリゲネス（183 ～254)などの教父が活躍し、ローマ帝国の迫害にも拘わらず、アレキサンドリアは当時のキリスト教世界の知的中心地となった。西暦284年からの皇帝ディオクレチアヌスの治世には厳しい迫害が行われ、殉教者が相次いだため、コプト暦はこの284 年8月29日を暦の第1日として、殉職者記念日にしている。この頃聖ソフィア（イスタンブールのセント・ソフィア寺院に名を遺す）や聖カテリーナ（シナイのセント・カテリーナ修道院に祭られている）などの殉教者が出た。またこの頃から砂漠で隠遁生活をする修道僧が現れ、現在の修道院生活の基礎を作った聖パコミウス、聖アントニウスなどの聖者が輩出した。

西暦313 年、皇帝コンスタンティヌスによってキリスト教が公認され（ミラノの勅令)、 325 年にはニカイア公会議が開かれ、アレキサンドリア主教区が会議の主導的地位にあり、特にエジプト出身のアタナシウス（296 ～373)とアリウス(250 ～336) のキリストのペルソナ論をめぐる論争は有名である。皇帝テオドシウス1世の治世に入った頃から、アレキサンドリアではキリストの単性説（モノフィジート、キリストの神性を強調する立場）が採用された。451 年のカルケドンの公会議以来、エジプト教会は単性説を取って、ローマ教会から正式に離脱し独立した。1054年東西教会が分離し、ローマ・カトリック教会とギリシャ正教会に分かれた後、エジプト教会は異端として扱われた。

642 年エジプトはイスライム化され、それ以後キリスト教徒は減少し、イスラム社会の少数派として現在に至る。しかし、その影響下にエチオピア教会、ヌビア教会を置き、初期キリスト教伝播への多大な貢献と、アタナシウスの神学、アントニウスの修道院思想というキリスト教世界全体の基礎となった権威と伝統を今日に伝えている。コプト語は現在では教会儀礼（特に讃美歌）に用いられるだけである。コプト教徒は人種的には勿論純粋の古代エジプト人の子孫とは言えないが、教会の儀礼の中に古代からの伝統を組み込み、エジプト独特の宗教儀礼を編み出した点に、ファラオの末裔としての誇りが読み取れる。一般に儀礼はギリシャ正教に近いが、シリア教会、アルメニア教会とともに、それぞれの民族的色彩の強い儀礼を護って、今日に至っている。クリスマスは1月7日、イースターはカトリックより1週間遅い、ムスリムのラマダンと同様に日中は食物も水も採らず、しかも動物質の食事を採らないという厳しい断食が年間を通じてイースター、クリスマス、キリストの昇天祭や聖母マリアの被昇天祭などの様々な祝祭の前に数週間行われる。イースター直前のPalm Sunday とそれに続く1週間をクリスマス以上の重要な祝祭日とする点にも特色がある。

現在の信徒数約700 万人、エジプト総人口の約10～15%を占め、カイロやタンタの都市部、アシュート、ルクソール、デンデラなど中・上エジプトに多く住む。カイロだけでも150 もの施設があり、その中に教会、学校、病院、養老院、孤児院なども含まれる。現在のコプト教会の最高指導者である法王シュヌーダ3世は1981年9月、故サダト前大統領によって身柄を拘束され、ワーディ・ナトルーンの聖ビショイ修道院内に監禁されていたが、1983年現ムバークラ大統領によって解放され、信徒の尊敬を一身に集めている。都市部の信徒には学者、医者、文化人、実業家などが多く、一般に教育水準が高いといわれている。

なお法王の正式名称はPope of Alexandria and Patriarch of the Missionary Province

of St. Mark 、コプト教会が聖マルコの伝道に　　している。
よってアレキサンドリアの地で始まったことを示

ビンヨン修道院で、聖ビジョンの聖遺骸を崇拝する人々と修道僧